

1月第2週の礼拝説教

■日 時：2023年1月8日（日）10：30－11：30 降誕節第3主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「初めであり、終わりである方」

■聖 書：ヨハネの黙示録第22章6～21節（新約p479）

■讃美歌：18「こころを高くあげよ！」472「朝ごとに主は目を覚まさせ、」

2023年の最初の主日礼拝の聖書箇所は、新約聖書の最後に置かれているヨハネの黙示録の最後の章22章から選びました。ヨハネの黙示録は、一世紀末、小アジア地方で迫害を受けていた初代教会の信徒たちを励ますために書かれたものだと言われています。その励ましの文書の最後の言葉が「主イエスよ、来てください。」という祈りだったのです。その後で「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」という新約聖書の中の様々な手紙の結びに記されている祝福の言葉があり、新約聖書の27巻全体、さらに言えば聖書全体の66巻を閉じているといってもよいでしょう。極端な言い方をすれば、新約聖書の全体が、あるいは聖書全体がこの祈りに向けて書かれていると言えるかもしれません。

この「主イエスよ、来てください。」という言葉はギリシャ語で記されていますが、新約聖書の中ではコリントの信徒への手紙一16章22節に「マラナ・タ（主よ、来てください）。」とその当時使われていたアラム語の発音そのままに記されています。「マラナ・タ」と区切ると、意味は「主よ、来てください」です。しかしもう一つの区切り方があり、「マラン・アタ」とすると、意味は「主は既に来られた」となります。私たちはこれから聖餐式の中で讃美歌の81番をご一緒に歌いますが「マラナ・タ、マラナ・タ、主のみ国がきますように。」と繰り返します。それは、初代のキリスト者たちは聖餐ごとに、さらに出会うごとに大切な挨拶として「マラナ・タ」と告げ合っていたと言われていることを想起することにもなります。「マラナ・タ」という言葉で「主は既に来られて、今ここにおられる」ということと、同時に「主よ、来てください」とを重ねあわせて告げ合い励まし合いながら祈りあっていたのです。

そしてもう一つ、「マラナ・タ」という言葉から、主イエスが「こう祈りなさい」と教えて下さった、私たちの祈りの根本である「主の祈り」の中の、「御国が来ますように」という言葉を連想させられます。神様の御国は主イエスの再臨によってもたらされるのですから、御国の到来を待つというのは、主イエスの再臨を待つことなのです。今の私たち

は、主イエスを信じる信仰において、神の国、神様のご支配の下で既に生かされ歩み始めています。しかしそれは信仰によることで、目に見えない隠されたことです。だからこそいつも、私たちの生かされているこの現実にも「御国を来させたまえ」と祈るのです。その神の国は主イエスの再臨によって完成するのです。「マラナ・タ」はそのことを待ち望む祈りです。ですから私たちは主の祈りを祈るたびに、「マラナ・タ」と祈っていると言うことができます。最後に、本日の説教題はヨハネの黙示録22章12節の「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる。13わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。」から来ています。私が信仰者として歩み出した頃に、繰り返し教えられたのは、キリスト教とは私たちの身近な電車の運行にたとえて言うならば、山手線のようにぐるぐると回っている輪廻転生のようなものではなく、東京駅を始発とするなら目的地がすでに定められている中央線のようなものである、ということでした。そのことを私なりに納得したのは、歴史には終わりがあり、それが歴史そのものの目的でもあるという考え方であり、終わりから逆に物事を見るという逆説的な考え方である、というキリスト教的終末論に出会ってからでした。それはまた、キリスト者にとっては、自分自身の人生を考えると、終末があるからこそ待つということを新しくとらえ直すことができる、そして、今という時を真剣に生かされて歩むことができる、ということとして、自分なりにとらえ直すことにもなりました。その終末から私たちに向かって「初めであり、終わりである」方が私たちを招き導いておられるのです。その確かさを本当に信じることができるなら、言い換えるなら、この歴史の初めであり終わりである方が主イエス・キリストであり、そのお方が今現在の私たちの歩みにも伴っておられると確信することができるなら、今の私たちの歩みの一つ一つにも必ず意味があること見出すことができると思います。そして、2023年という新しい年も「アーメン、主イエスよ、来てください。」と祈りつつ、歩みたいと思います。